

20年目に思うこと



近藤高志

東京大学先端科学技術研究センター
[153-8904] 東京都目黒区駒場4-6-1
副所長, 教授, 博士(工学).
専門は半導体材料, 光デバイス.
tkondo@castle.t.u-tokyo.ac.jp
<http://www.castle.t.u-tokyo.ac.jp/>

応用物理学会(応物)で男女共同参画の活動にかかわるようになったのは、確か2001年ごろからだ。応物事務局の伊藤香代子さん(彼女がいなければ応物男女共同参画委員会も男女共同参画学協会連絡会も、今のような形では存在しなかったはず)に手伝うように言われ、最初はあまり深く考えずに会合に顔を出してから、もう20年近く経つ。今になって考えてみると、女性ばかりで構成されていた男女共同参画ネットワーク準備委員会に男性も加えて男女共同参画委員会とする際の数合わせだったのだろう。私はその後、2004～2005年度に男女共同参画委員会の委員長を務め、今に至るまで委員会のメンバーであり続けることとなった。2001年当時の応物は、後藤俊夫副会長(2002～2003年度会長)のバックアップのもと、小箆香椎子先生と遠山嘉一さんが伊藤さんとタッグを組んで、男女共同参画活動の立ち上げを強力に進めていた。応物が日本化学会、日本物理学会と協力して2002年10月に設立した男女共同参画学協会連絡会も、その一連の活動の成果の一つであった。私は、この連絡会の実施した初めての大規模アンケートの結果分析に何の因果かかわることになり、2004年3月に文部科学省に提出した報告書の執筆を担当する羽目になった。これは私の人生の中でも特別に大変な仕事であった。化学工学会の辻佳子さんと生物物理学会の国岡由紀さん、応物の堂免恵さんの献身的な協力がなければ成し遂げられなかったと思う。この報告書はその後の理工系分野の男女共同参画にそれなりの影響を与えたが、私自身にとっても、この報告書作成は男女共同参画の問題についてじっくりと考える良い機会であったし、その後の周知活動も得難い経験となった。

私自身は、理工系研究者コミュニティの中で多数派に常に属してきたのだが、女性のあまりの少なさに強い違和感を抱いてきた(東大理Iの男ばかりの教室に初めて入ったときのあの衝撃!)。応物の男女共同参画委員会の女性メンバーはそれぞれに活躍されている元気な方ばかりだったが、それでも大学や学会の内外で触れた情報から、やはり女性に対する不公正が陰に陽に存在するのだと感じた。こうしたことが、私が男女共

同参画にそれなりに強くかかわる動機になったことは確かなのだが、私個人にとっての最強の推進剤は娘の存在だったと思う。当時、小学校に上がる直前だった娘をこのような著しい不均衡の存在する社会に送り出してはならないと思ったものだった。その娘もこの春、社会人として独り立ちした。さて、この間、何かが少しでも変わっただろうか。

私の所属する東京大学の学部学生に占める女子の割合は2019年の時点で19%。入学者の女性比率は2004年の21%がピークで、いまだに20%ラインの下をうろうろしている。東京大学工学部の学部女子学生比率は約9%で、なかなか1割を超えることができない。一方、応用物理学会の会員の女性比率は現在9%前後、2000年ごろと比べて上昇している(はずである。当時は会員の性別を把握していなかった!)が、ここ数年は男性会員数の減少が女性比率を押し上げているだけで女性会員が増えているわけではない。委員会などでの議論も十年(いや、20年か)一日の如しで、「この話、前にもしたな」とたびたび思う。「お前はいったい何をやってきたのか」と非難されてもやむを得まい。とはいえ、大学や学会の積極的な取り組みも増えてきた。保育施設の拡充や女性採用推進の明言、RPDなどの支援体制の整備、女子中高生に対する周知活動などなど。応物ではついに初の女性会長(波多野睦子会長は応物男女共同参画委員会の立ち上げ時のメンバーだった)も誕生した。前進はしている。

理工系分野での男女共同参画の問題では、実は誰もが当事者である。他人ごとではない。女性に興味をもちてもらえない、女性が参入をためらう分野は衰退する。女性が「研究者・技術者という素晴らしい仕事」(これは私の恩師の伊藤良一先生が日頃使っておられたフレーズだ)につきにくいのだとしたら、それは理工系コミュニティにとって大きな損失である(だから、アフーマティブ・アクションは必要だと思う)と同時に、いやそれ以上に、女性にとって残念なもったいないことだと思う。コロナ禍を経て世界は大きく変わるだろう。チャンスかもしれない。仲間を増やして、前を向いて進もう。